

白洲正子著「^{むげん}夢幻抄一人は死ぬその日まで勉強一Ⅱ」世界文化社 1997年7月1日刊を読む

母の憶い出

- (1)母の死後十年を経て、この書を出すにつけて、心からその冥福を祈ると共に、ありし日の母のことどもを憶い出してみたい。
 - (2)若い頃の写真を見ると、その頃のはやりであろうか、小さいからだには細かい柄の着物のふきの太いのが痛々しく見えるほどで、その顔は透き通るように白くかぼそい。からだは細く丈は低くとも、母はその小さなからだ中にあふれるばかりのセンス・オヴ・ヒューモアと、異常なイマジネーションをたくわえていた。そして弱いからだにも似ず、何時も機嫌よく、傍の見る眼も羨ましいほど、一日一日を愉しんで送っていた。
 - (3)私などとくらべると、お姫様育ちで、うき世の事はあまり知らなかったらしい。無駄づかいはしなかったが、非常に贅沢ではあった。その贅沢さは、興味の上に、思想の上にまで及んで、生半可の事は嫌いであったから、むしろこれは母の長所であったと信ずる。
- (1)今でも母の集めた本が家中に入りきれないほど遺っている。中には、一生のうちに読む事の出来なかった様な分厚な大巻もあるけれど、
 - (2)「自分が読まなくても、子孫の中にこの蔵書をほんとうに有り難く思ってくれる人が一人でもあったら、それで自分は満足である」
 - (3)といいいい、買い集めていた。晩年十年あまりの長い病^{やまい}にも、いやな顔ひとつ見せず、「人は死ぬその日まで進歩しなくては」
といて、愚痴ひとつこぼさずに終わったのも、この様な趣味の故^{ゆえ}である。
- (1)御殿場の駅からのぼること一里あまり、はじめの頃は道もなかったもので、馬力にゆられて行く所に家を建てた。今こそ大流行の茅葺き屋根の百姓家であるが、四十年も前にそんな物好きな事をする人は、他になかったであろう。あたり四、五町には人家も見えず、只、虫の音と月とを友に暮らす生活を母はこよなく愛した。
 - (2)景色とて、どこ迄も続く広い裾野に、夏は萩が咲き乱れ、秋は龍胆の花が空の色をうつして静かに咲いているばかりで、庭という庭もないのだけれども、あまりおいしい料理はたべあきる様に、あまり凝った着物は見あきる様に、滝もなければ苔もない雑草だらけのその裾野の景色こそ、私達親子にとってはかけがえのない憶い出の地なのだ。
 - (3)そこで歌をつくり、香をきいておくることの出来た母の一生は、あまり長いとはいえないが、幸福なものであったろう。
- (1)母はいつ死ぬともわからぬほどからだが弱っていたときに、子供達二人までをさびしい顔ひとつ見せずに遠く外国に旅立たせた。
 - (2)そして自分はその間、子供達が大きくなったときのために、せっせと先の方を一生懸命歩んでいたのだった。
 - (3)私が四年後に帰国してから、母の心づくしの『源氏物語』や、『万葉』の御講義も、アメ

リカ帰りの若い娘はねむり半分に聞きながしていたのだから、今から思えば勿体ない事である。

5. (1)それから一年ののちに母は亡くなった。子が親を失う悲しみは大きい。しかし私には、その当時、肉親を失ったというその大きな悲しみ以外には味わわれなかったのだが、今になって、十年後の今になって、はじめてもっともっと大きなものを私は失ってしまったのだという事を知った。そして年毎にこの悲しみは深くなる。
- (2)今、私は幸福な家庭を持っていて、時々里に帰って着物やお芝居見物をねだる母を必要とはしない。それに、父がその方の役目は充分以上にはたしてしてくれるのだし。
- (3)母のお供で見に行った中宮寺の観音は、子供の眼には只ねむそうな仏様としかうつらなかつたのだが、今その同じ観音は、永遠の慈母の如きほほえみをたたえて私を恍惚とさせる。
6. (1)母のうしろで足のしびれを我慢しながら見物した『檜垣^{ひがき}』や『卒都婆小町^{そとばこまち}』などいうむずかしい名前の能にも、この頃の私は何も忘れはてて涙のこぼれるほど感激する。
- (2)着物など凝りにこったあげく、終には無地^{ついで}にこしたものはないといいた其の気持ちもわかる。自分で袱紗^{ふくさ}さばきはせぬものの、薄茶の味もおぼえた。
伽羅^{きやら}のかおりの床^{ゆか}しさも知った。
- (3)が、共に楽しみ、そして導いてくれる友を私は母をなくしたと同時に失ってしまったのだ。この頃になってようやく大人の世界に足をふみ入れたばかりの私は、この先ひとりて歩まねばならぬのかと思うと、いつも一足先を歩んでいてくれた母の面影が恋しい。
7. (1)お墓にもたまにしか参らないし、母のした事は何かひとつ真似する事も出来ぬ不肖の子ながら、只ひとつ、母の遺言^{さみだれ}ともいふべき「人間は死ぬまで勉強しなくては」という言葉だけは忘れない。
- (2)外は五月雨、くらい静かな夜である。私は傍^{そば}にある読みさしの本をとりあげる。
- (3)母よ、しずかにしずかにおやすみなさい。

P10 ~ 13

<コメント>

白洲正子の母・樺山常子(佐佐木信綱門下の歌人でもあった。著者が19歳、白洲次郎と結婚した年の12月、死去)は、貝原益軒著「楽訓」に示された「楽しみ」を身に着けていた。「人間は死ぬまで勉強しなくては」の考えは、本当の「楽しみ」を見出すのに欠かせない。

2022年1月3日 林明夫記